

沖縄は 海と空でできている



第2話 離島に台風が来ると大騒ぎ【前編】

ジョージ・スギーニー
GEORGE SUGENEY

脳梗塞

2003年 春

東京は桜が満開で、あちこちのグループから花見の誘いがあった。
新宿の公園で学生時代の仲間と夜桜を見ながら飲むことになり、夜6時に始まった。
日中はポカポカの陽気でも夜は少し肌寒い。
毎年思うことだが、ビールは最初の1～2缶だけで途中から熱燗が欲しくなる。
後半になればなるほどビールは辛い。

そういえば熱燗というと私の親父は無類の熱燗好きだ。
イタリアンを食べに行くと「何飲む？」と聞くと「熱燗」と返ってくる。
真夏の沖縄で飲食店へ行っても「熱燗」。
しかしさすがに沖縄で熱燗を置いている店は少ない。
なのでたいていは泡盛のお湯割りになるのだが、とにかく熱燗好きである。

そんな事をボンヤリと考えていたら、実家に居る妹から電話が鳴った。
妹とは年に1～2回しか連絡を取っていない。
それも盆と正月の帰省前に連絡を取るぐらいで、この時期に着信があるのは珍しい。
だから良い知らせか悪い知らせのどちらかだろうと予想がついた。
少し真顔になって電話に出ると

「お兄いちゃん？お父さんが脳梗塞で倒れて今救急車で運ばれた」

悪い知らせだった。
親父はまだ66歳だが、毎晩浴びるほど日本酒を呑み缶ピースを吸っている。
そして短気だ。
脳梗塞を起こす理由は充分あった。

昔から自由奔放に生きていて、呑み過ぎや吸い過ぎを注意しても誰の言う事も聞こうとしなかった。
台風が近付いてきている海で釣りをしている時もそうだった。
母が「海が荒れてきたからもう釣りはやめて」と言っているのを聞かずに釣りを続けていて、荒波にさらわれて海へ落ちた事があった。
今でこそ笑い話だが、その話を聞く限り親父はその時に亡くなってもおかしくない出来事だった。



あれは私が3歳の時、祖父母と両親の家族5人で静岡へ釣りに行った時の事だった。
その時妹はまだいない。
台風が接近していたため海がかなり荒れてきたので、母は親父に釣りをやめるように何度も言っていたが全く話を聞こうとせず、ずっと堤防で釣りをしていた。
母は遠くから親父を見ていたが、ふと波打ち際に目をやると当時3歳だった私と祖父が歩いていた。
高波にさらわれるといけないから戻るようにと声をかけようとした時、大きな波が私と祖父を襲った。
大波が二人を包んだと思った次の瞬間、二人の姿は無かったようだ。
母はその時
「まだ3年しか生きてないのに」

と思っただらいい。

そして波が引くと、地面に倒れている二人の姿が現れた。

私もその時の記憶は薄っすらと残っている。

波に呑まれている時、祖父は小さな私が波に連れていかれないように、手をギュッと強く握って放さなかった。

私は何が起きているのか分からず、とにかく怖かった。

波に呑まれた瞬間何も見えなくなり、そして海水を沢山飲み、気付いたら寝転がっていた。

横を見ると勢いよく流れる水の向こうに祖父の顔が見え隠れし、強く握られた右手がとても痛く、体じゅう貝や石で傷だらけになった。

そして何が起きているのか分からない私は、祖父が私に恐怖を与えていると思い、それから祖父を嫌いになった。

3歳の私には、どうして怖い思いをしたのか分析する力は無く、目に入ってきた人が私に恐怖を与えているとしか思えなかった。

そしてその時強く握られた右手の痛みは、祖父の愛情の大きさだったと気付いたのはそれから4年後、祖父の葬式の時だった。

今でもあの時の激しく流れる水の向こうに見え隠れした祖父の顔を思い出すと、目頭が熱くなる。

あの世で会ったら真っ先にその時の御礼と、嫌いになった事を謝りたい。

母は私と祖父の姿が現れた時、「早くこっちに来なさい、また波が来るから」と叫んだそうだ。

しかしそれは全く覚えていない。

そして母はホッとしたのも束の間、親父が釣りをしていた堤防を見ると、親父の姿が無かったそうだ。

釣りをやめて引き上げたのだと何度も心の中で言い聞かせていたが、どんなに探しても親父の姿が無い。

実はその時、親父は波にさらわれて海の中だったのだ。

親父は竿を持ったまま海へ呑み込まれ、幸いにも竿がテトラポットに引っかかって堪えていた。

何とかして戻ろうとしていたが、沖へ連れて行こうとする力が強く、戻るに戻れず竿を放さないようにすることで精一杯だった。

なんとか流されまいと格闘していたが、

「もう息がもたない、

そう思った時、奇跡が起きた。

波が大きく引いたと思ったら、次に海の底を抉るような大きな波がやってきた。

そしてその下から突き上げるような波で親父は堤防へ戻された。

まるでマンガだ。



そんな強運の過去を持つ親父だったが、病には勝てなかったようだ。

もう少し母の話を聞いて酒を減らすなり、タバコを減らすなりしておけば良かったのに。

そう思ったが、「聞く耳を持って堅苦しく生きていくより、好きな事をやって短くも濃い人生を送りたいんだ」そんな親父の声が聞こえてきた。

今から愛知の実家へ帰るか？

新幹線はまだある筈だ。

しかし明日は大事な契約がある。
危篤状態という訳ではないから明日の契約が終わってから行くか。
酔いも一気に醒め、いろんな事が頭を過ぎった。

そう言えば「勝負師親の死に目に会えず」と言う言葉を耳にした事がある。
私の尊敬する世界の王貞治さんのお父さんが亡くなった時、王さんはナイターがあつて親の死に目に会えなかったらしい。
当時山手線の中塗り広告で、「勝負師親の死に目に会えず」と書いてあつたのを思い出した。
勝負師とはそういうものらしい。

でも私は今何をしているかと言うと夜の花見だ。
特に勝負らしい勝負はしていない。
しかし今愛知に帰ったら明日の契約に間に合わない。
どうするか迷ったが、とりあえず花見は切り上げて自宅へ帰って様子を伺う事にした。
もし親父が亡くなって、その時俺は何をしていたか聞かれた時に、
`花見、
それはダメだ。
あの世で会った時に絶対怒られる。
なのでまずは自宅に帰ろう。

自宅に着いても落ち着かない時間が過ぎていった。
こんなソワソワしているならいっその事帰った方がどれだけ楽か。
後になって考えれば、契約を別の人に頼めばよかつたと思うのだが、その時はその考えは浮かんでこなかつた。
自分の都合で他の人に迷惑をかけたくなかつたのだ。

そろそろ最終の新幹線が無くなる。
今日中に行くのであれば今出るしかない。
そう考えていた時、妹から着信があつた。
親父は命に別状はないが、言語障害が少し残つたのと右手右足が麻痺しているらしい。
物を持つ事は辛うじてできるが、細かい動作ができないらしい。
それは美容師である親父に引導を渡す事になる、と思つたのだが、退院後何日かのリハビリを経て、右手に持つハサミを電動のバリカンに替えて現場に復帰していた。
やはり並の生命力ではない。

もう駄目かという状況から何とかしてしまうのは親父の専売特許だ。
3年前に家族で伊豆へ行った時もそうだった。



私はコンビニの雑誌で`誰も居ない穴場のビーチ、という特集を見つけた。
その穴場のビーチの一つに、陸地からアクセスできないというビーチがあつた。
離島ではなく本州の一部だが、船で渡らないと行けないのだ。
雑誌の写真には、とても波が穏やかでゆったりと時間が流れているビーチが写っていた。
まさに探し求めていたプライベートビーチだ。
バーベキューコンロとタープを持って、実家の家族みんなでビーチへ向かつた。

家族旅行だったのだが、何故か元後輩の小湊も一緒に居た。
渡し船に沢山の荷物を乗せ、プライベートビーチへと出航した。
そしてものの数分でビーチが見えてきた。
しかし目に飛び込んできたのは、無数の人ばかり。
足の踏み場も無いほど人がひしめき合い、とてもプライベートビーチとはかけ離れた光景だ。
雑誌の「誰も居ない」という文字に惹かれ、全国から集まってしまったようだ。

とてもタープを張るスペースも無く、自分達が座るスペースを確保するのさえ難しい。
ましてバーベキューをするなんてとんでもない状況だ。
持ってきた食材が全部無駄になってしまった。

取りあえず船から大量の荷物を栈橋に下ろすと、渡し船はまた戻っていった。
荷物を栈橋に置いておくわけにもいかないので、なんとか畳1帖位のスペースを見つけてそこへ移動することにした。
親父、妹、甥っ子、そして私が荷物を運んでいるが小湊の姿が無い。
栈橋の荷物の所へ戻ると、そこに小湊が居た。

「何してるんだよ、お前も運べよ」
「いや、誰か荷物の番をしてないと」
「船でしか来られないビーチなのに誰が盗むんだよ。盗んでもビーチから脱出できないだろ」
「え～分かんないですよ」
「だったら甥っ子か妹に番をさせて、男のお前が運ぶべきだろ」
「だって妹さん荷物持って行っちゃったから」
「それはお前の行動が遅いからだろ」
「でも・・・」

相手をするのが面倒くさくなったので、無視して荷物を運び出した。

何往復かしてやっと運び終えると、親父が何やらバッグの中を探っている。
取り出したのはサバイバルナイフ。
群衆の外側（山側）にある、高さ1m位の草を刈り始めた。
そしてあっという間に3m四方を刈り取り、タープを張るスペースを作ったのだ。
まるでトラブルを楽しんでいるようだった。
そしてタープをみんなで張り始めたが、まともな小湊の姿が無い。
その頃彼は小2の甥っ子から浮輪を取り上げて泳いでいた。
「この男は接待を受けに来たのか？」
そう思った。



そんな事があったのも3年前。
親父の草を刈って場所を作るという発想には脱帽する。
そんなバイタリティがある親父だったから、「亡くなる」という事を考えた事がなかった。
でも今回の件で、「いつまでも居るわけじゃないんだ」と改めて思った。
そしたら沖縄の天然水族館へどうしても連れて行きたくなった。
昔に比べるとサンゴが減ったと言っても、他の海に比べればまだまだ凄い。
後悔しないためにも、来年の夏は阿嘉島へ連れて行くことにした。

台風ノ島

2004年 夏

阿嘉島にはすっかり虜になり、今は年に4回のペースで訪れている。

今年も6月に2回と7月に1回で計3回行っているが、今年は台風の当り年で3回とも絡んできた。

沖縄へ行く1週間位前になると必ず台風が発生し、出発する頃には沖縄近辺をウロウロしているから欠航にならないか毎回ヒヤヒヤさせられた。

7月に行った時は特に酷かった。

正に台風と台風の間に行った旅行になり、出発の時からドキドキさせられた。



それは土曜日から二泊三日のプランだったのだが、出発前日の金曜日は台風が沖縄本島を直撃し全便欠航になっていて、台風が本島近くで停滞していたため当日もギリギリまで飛び立つか分からず、搭乗口の前で待たされた。

するとランドホステスさんが来て

「一応飛び立ちますが、状況によっては那覇ではなく福岡に着陸する可能性があります。それに御承諾いただけるなら」

という条件付きのフライトになった。

福岡には行った事がないから、そうなったらそうなったでいいかと思いきり込んだ。

飛び立つと、思ったより揺れていなかったが、やはり沖縄が近くなるに連れ揺れ始めた。

そして着陸態勢に入った頃には、結構な揺れになっていた。

揺れたというよりも、綱渡りをしながら降下していった、と言う方が的確だろう。

右に傾いたと思えば即座に水平に戻し、今度は左だと思いと瞬時に戻る。

まるで1本のロープの上で、バランスを取りながら進んでいるようだった。

その細かいバランス調整を見ていると、パイロットの「一瞬の気の緩みも許されない」という緊張感が伝わってきて、私の足にも力が入った。

「ドーン ミシミシ ボオーー、」

勢いよく着陸し、機内の収納扉がミシミシと悲鳴をあげた。

強めに着陸した方がブレーキの効きがいいそうだが、勢い余って少し斜めにバウンドしたので一瞬冷やりとした。

そしてその後逆噴射をした時に、無事に着陸ができたという安堵感を得た。

スポットに到着する迄、ゆっくりと一定の速度で進む姿はまるでウィングランをしている様だ。

結局着陸した所は、幸か不幸か初めての福岡ではなく、那覇だった。

しかしホツとしたのも束の間。

次の台風がジワジワと沖縄へ近付いていた。

今度は帰りが心配だ。

でも今から心配していたら遊びに集中できない。

それに心配をしても状況が変わるわけではない。

なので気付いていないフリをして遊ぶ事にした。

空がこんな状況だから海も荒れていて船は欠航だろう。

残念だが今回は阿嘉島に渡れそうもない。

そう思っていたのだが、次の日奇跡的に渡る事ができた。

ニシバマビーチはいつもより波があったものの泳ぐのに全く影響はなく、ずっと快晴で、あっという間の3日間だった。

そして迫りくる台風から逃げるように東京へ帰ってきた。

その翌日、台風は沖縄本島を直撃し、フライトは全便欠航。

正に台風と台風の間に挟まれた旅行で、前にも後ろにも一日ズレていたら、行けなかったし帰ってこられなかった。



それほど今年は台風がよく絡んでくる。

私が沖縄へ来る度に台風が訪れるから、沖縄の知人に、

「ジョーさん、台風を呼んでますねえ」

そう言われていた。

元来晴れ男だったが嵐も呼ぶ男だったようだ。

そして今年は、去年脳梗塞で倒れた親父を阿嘉島へ連れて行く約束をしている。

この先何回一緒に旅行へ行けるだろうか。

私が東京に出て以来、一緒に旅行へ行く機会がぐっと減っていたので久しぶりだ。

しかも親父と二人旅行は子供の頃以来だ。

脳梗塞の後遺症はまだ少し残っているようだが、動けるうちにあの島へ連れて行こうと思った。

心配なのは台風だ。

今回こそ絡まない事を願った。



2004年8月16日

♪ターン↑ ターン↓ ターン↑ ターン↑↑、(空港のチャイム)

♪日本航空 沖縄行き 901便は、これよりご搭乗の皆様を機内へのご案内します。小さなお子様連れの・・・

「オヤジ、トイレは大丈夫？」

「さっき行った」

「機内に入ったら飲み物のサービスが始まる前に行つといた方がいいよ。その後じゃ一気に混むから」

「分かってますよ」

ホントに分かっていたのならいいが、おそらく分かっていなかっただろう。

親父は家族に対して強がる面がある。

昔からバイタリティがあつて家族を引っ張ってきたが、去年脳梗塞を起こし、最近ではトイレも近くなつてきて老化には勝てない。

それを家族に心配されるのはいい気がしないようだ。

「あ、上杉さん、自分トイレ行ってきます」

小湊だ。

親父との二人旅行の筈だったが、なぜか小湊と一緒に付いてきた。

「あまり遅くなるなよ」

「小さい方なんで大丈夫です」

そう言って走っていった。

搭乗口を見ると20mかそれ以上の行列ができていた。

それを見た親父が立ち上がった。

「オヤジ、まだ早いよ。まだ座ってた方がいい」

「みんな並んどるぞ。並んだ方がいいじゃないのか」

「今最後尾に並んで立ちっ放しでいるより、最後尾が入口まで進んで来るのを座って待ってた方が楽でしょ」

「そりゃ楽だけど入るのが遅くなるじゃないか」

「別に自由席じゃないから席は無くならないよ」

「無くならんけど、みんな並んどって自分達だけ並んどらんかったら何か心配になるなあ」

う～ん・・・その心理は分からないでもない。

確かに目の前に何十人もの人が並んでいるのに、自分達だけポツンと椅子に座っていると少しソワソワして不安な気持ちにはなる。

なぜ不安になるのか考えてみた。

自分の中にある「ソワソワした不安」とは具体的に何に対してなのか、それを明確にしないから不安になるのだろう。

全てがという訳ではないが、不安材料を明確にしてそれに対する対策を講じておけば不安は解消される。

では今回の事で考えてみると、先ず何が「ソワソワ」させているのか考えてみる。

多数の人が並んでいて自分達だけが並んでいない。

比率は100：1ぐらい圧倒的に少数側だ。

すると本当は並ばないといけない理由があるのに、それを自分が見落としているのではないか？という気持ちになる。

だとすれば右へならえで同じ行動を取っておけば無難だ。

「じゃあ並ぼう、という心理が働くわけだ。

では並ばなければならない理由を見落としていないか考え、それに対する対策を講じておけばいいわけだ。

今後の行動について考えてみる。

1. 搭乗口でチケットを通して機内へ入る
2. 座席を探す
3. 荷物を収納へ入れる
4. 座席に座ってベルトを締める

ざっとこれぐらいだろう。

ではこの中で、並ばないと実行ができなくなる行動、若しくは何かしらの支障を来たしてしまう行動があるかチェックしてみる。

1. 搭乗口でチケットを通して機内へ入る

並ばずに搭乗口付近の椅子に座って雑誌を読んでいたとする。

その間に並んでいた人がすべて機内へ入り、それに気付かず雑誌に夢中になっていてもグランドホステスさんが声を掛けてくれるから置いてきぼりにはならない。

では搭乗口付近から離れた場合、並んでいた人がすべて機内へ入ってもチェックインした人が搭乗していないとグランドホステスさんは大探しをする。

放送で呼び出したり、大声で名前を叫びながら走り回ってそれはもう大変だ。

たまに探されている人を見かけるがあれは駄目だ。

中には「だって出発までまだ2～3分あるでしょ？」と堂々と言っている人が居るが、出発時刻とは飛行機が動き出す時間だ。

なので当然それまでに飛行機へ乗り込みベルトを締めていなければいけないのだ。

そういう人を見かけると腹が立ってきて、見えない角度から睨み付けたくなる。

上記の事から1に関しては搭乗口付近に居れば並ばなくても問題はない。

2. 座席を探す

機内での行動なので、外で並ぶか並ばないかというのは、機内へ入るのが早いか遅いかという違いになってくる。

搭乗するのが後になればなるほど空席が少なくなる。

即ち探す時に自分の座席だけぽっかり空いているので見つけ易くなるわけだ。

結果並ぶ必要はない。

3. 荷物を収納へ入れる

これについては並んでいた方が若干のメリットはある。

遅く搭乗すると手荷物を入れる収納がいっぱいで、入れられる所をあちこち探さなければならない。

なので持ち込みの荷物がある場合は並んだ方が良い。

しかし今回は持ち込む荷物が小さいので、収納が空いていなければ座席の下へ入れればよい。

従って並ぶ必要はない。

4. 座席に座ってベルトを締める

機内に入るのが早くても遅くても、何ら影響しない。

なので並ぶ必要なし。

以上の事からソワソワした不安から解放されるには、搭乗口付近にさえ居れば並んでいなくても問題はないという結論に達した。

検証により座って待つ事にしたが、結局日本人は並ぶのが好きなのかもしれない。

都内でもあちこちのラーメン屋で並んでいるのをよく見かける。

並ぶ事が悪い事ではないが、私は少し苦手だ。

そんな事を考えながら行列の最後尾に目をやると、見慣れた人物が目に入ってきた。

トイレから戻ってきた小湊だった。

私と目が合うと「並ばないんですか？」と言いたげな顔でキョトンとしている。

キョトンとしたいのは私の方だ。

トイレから戻ったら先ず声を掛けるだろ。

すると自分の前を人差し指で指して「前に入れてあげますよ」みたいな素振りをする。

私は右手を顔の前で左右に振り、人差し指で自分を指し、そして自分の居る場所を2回指した。

それはこういう意味だ。

「いや、いい。俺は、ここに、居る、

そして更に続けて人差し指で2回小湊を指した。

「お前は、そこに居ろ、

すると小湊は後ろを振り返った。

しかし後ろには並んで待っている人が何人か居るだけで、特に何も無いのでキョトンとした顔で私を見る。
私はまた手を左右に振り、人差し指で2回小湊を指した。

「お前は、そこに居ろ、
するとまた後ろを振り返った。
そしてまた私を見る。

私は更に大きいジェスチャーで今度は3回小湊を指した。

「お前は、そこに、居ろ、
するとまた後ろを振り返った。
まるで「志村後ろ、だ。

今度は首を傾げながら、列を外れて私の所へやってきた。

「上杉さん、何ですか？」
「バカ、お前はそこに居ろ、ってやってたんだよ」
「えー、列から外れちゃったじゃないですかあ」
そう言って更に後ろへ伸びた最後尾へ戻っていった。

今回の沖縄旅行は願いが通じて台風は発生せず、9月1日は定刻通り羽田空港を飛び立ち那覇空港へと向かった。
フライトも揺れることなく、快適な空の旅だった。
この時点では、楽しい4泊5日の旅行になると思っていた。
しかし今年一番、いや人生で一番大変な旅になる事をこの時は知る由も無かった。

沖縄は海と空で出来ている 【第2話】 離島に台風が来ると大騒ぎ 《前編》

<http://p.booklog.jp/book/100717>

著者：ジョージ・スギーニー

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jeorge5/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/100717>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/100717>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ